３．摘蕾・摘花

春になり、枝に芽生えた蕾（つぼみ）を取り除きながら数を調整します。
花が咲いた後、樹全体の枝ぶりを見て花を摘む作業を行います。

ポイント

実になる前の「摘蕾」と実を付けてからの「予備摘果」「本摘果」、袋掛けに合わせて行う「見直し摘果」などの段階を踏んで適正着果にします。

手間をかけ段階的に減らしていく理由は、病害虫の影響や果実の生育状況、葉や枝の状態を観察しながら収穫する果実の数を調整するためです。

また、急な摘果は核割れの原因にもなるため、徐々に減らしていくことが必要です。

あかつきは小玉になりやすい品種です。摘蕾を早期に強めに行い、花の咲く量を減らしてください。大玉にするために他の品種よりも強めに行ってください。

【摘蕾の実施】《重要作業》

（１）摘蕾のねらい

① 「晩霜があるから摘蕾しない」では、適玉・高糖度のももは取れません。
- 貯蔵養分の無駄な消耗を防ぎ、幼果の肥大・新梢の伸長・細根の発達を助けて葉枚数を早く確保しましょう。
- 生育成熟期間の短い、早・中生種ほど恩恵が大きくでます。

② 摘果作業の効率化を図り、生理障害(核割れ・落果)を軽減するために重要な作業です。
- 鈴なりの果実を一度に摘果して落とすと、生理障害の原因になりますが、摘蕾では、影響が少なくなります。
- 摘蕾⇒（花摘み）⇒予備摘果⇒本摘果⇒見直摘果と、順々に落とします。

（２） 実施時期

① 早い⇒効果高い・作業性悪い
遅い⇒効果低い・作業性良い・葉芽を傷めやすいです。

② 花蕾が丸く膨らみ、先端にピンク色の花弁が僅かに見え始めるころから開花までに行います。

③ 早くから実施すると、作業効率は低下するが効果は高いです。

（３） 実施方法

① 葉芽をきずつけないように薄い手袋をはめて行いましょう。

② 長・中果枝は、片方の手で枝の先端をつまみ、他の手で先端から基部に向けて、蕾をこすり落とします。

③ 親指と人差し指で軽く挟んで、上下の蕾をしごいて落してもよいです。

④ 短果枝は指先で枝をもむようにし、落とします。

摘蕾程度の目安

強く実施	状態	弱く実施
老木	樹齢	若木
弱い樹	樹勢	強い樹
弱い樹	せん定の程度	強い樹
少ない	核割れ・変形・生理落果	多い
良い	結果性	不良
少ない	施肥量	多い
小さい	凍霜害の危険性	大きい
多い	花粉量	少ない

（４）品種別摘蕾の程度

結実が確保できる場合は、初期成育向上、玉肥大向上、核障害低減を目的とし基準より、「強い摘蕾」を実施します。

全蕾の 70～80％を落としてよい品種・・白鳳系、あかつき、なつっこ
全蕾の 50～60％を落としてよい品種・・白根白桃・水野ネクタリン
他は軽く落とす品種（毎年結実が安定している場合は多めに落とす）

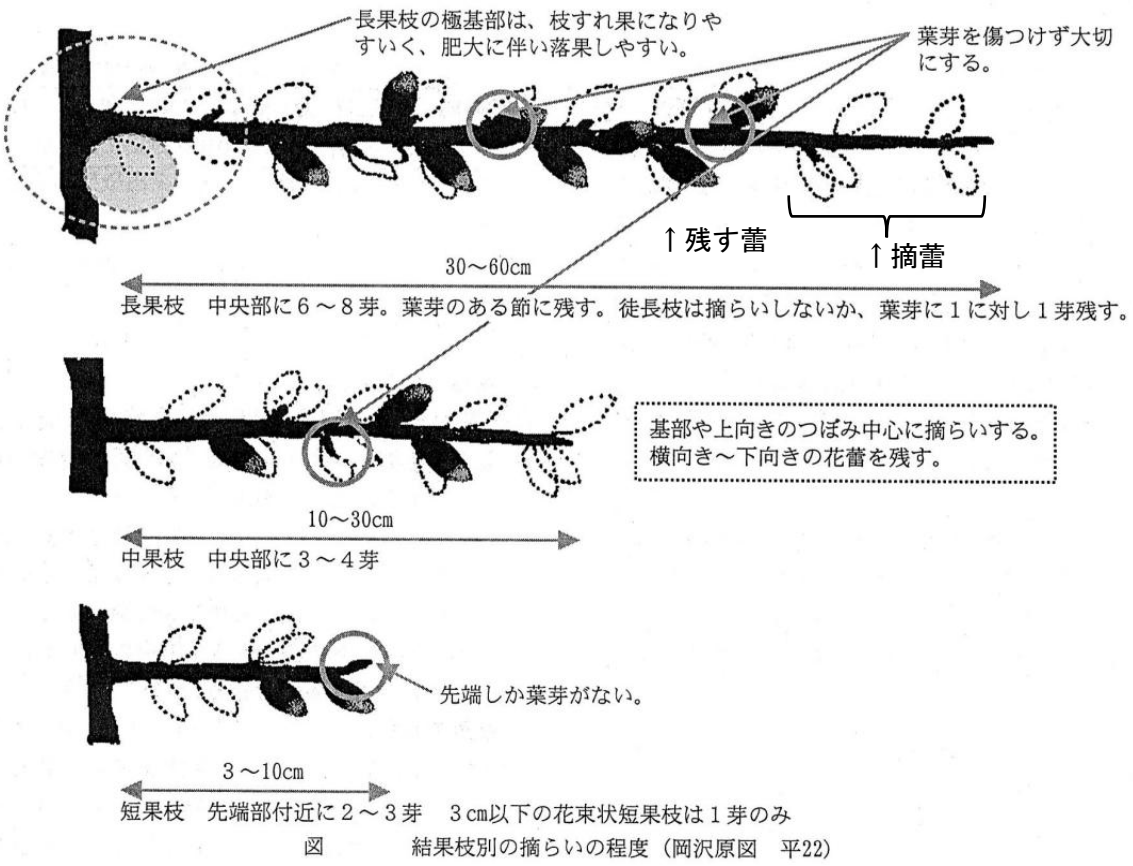

図　　結果枝別の摘らいの程度（岡沢原図　平22）

（５）実施上の注意事項

① 若木は樹形作りを第一に考え、主枝・亜主枝の先端部の蕾は全部落とします。

② 特に主枝・亜主枝の延長枝は、側枝の先端も摘蕾し垂れ下がり防止に努めます。

③ 長果枝の基部１５cm間の直上芽は、同時に芽かき（芽こき）して徒長枝の発生を未然に防止します。